

令和2年度 一般介護予防事業の取り組み状況

新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が解除された令和2年6月から、感染予防対策を講じて可能な限り全ての事業を継続実施した。

	No.	事業名等	実施日	内容	開催回数・参加人数
介護予防把握事業	1	実態把握	随時	地域包括支援センター及び在宅介護支援センターの総合相談業務の中で、民生委員等地域の関係者と連携を図り、地域の高齢者の心身の状況や家庭環境等を把握することにより、支援を必要とする高齢者や家族を早期に把握し、早期対応を図った。	延人数376人
介護予防普及啓発事業	1	介護予防出前講座	随時	介護予防に関する基本的な知識の普及・啓発や健康やかな生活の維持を目的として、高齢者が参加する団体に講師を派遣し、講座を開催した。	4回 延人数63人 (内訳) シナプソロジー 2回、延人数30人 食事・栄養について 1回、人数15人 運動機能の向上について 1回、人数18人
	2	介護予防研修会	令和3年3月1日、3月8日、17日	参加者が介護予防の視点を持って生活できることを目的として、認知症、コグニサイズ、口腔機能向上に関する研修会を開催した。	3回 実人数40人、延人数79人
	3	認知症簡易チェック	通年	認知症の早期発見・対応のための認知症簡易チェックサイトについて、広報やチラシ等により周知を図った。	延3,080人利用
地域介護予防活動支援事業	1	はにとれ教室	通年	再開に向けて市主催教室のリーダーと話し合いを重ねた。市主催はにとれ教室参加者にも、感染予防対策について繰り返し周知するとともに、教室を2～3つの班に分けるなどの環境整備を行い、対策を講じて実施した。また体力測定やアンケートの実施、今後に備えて緊急連絡網を整備し、活用した。はにとれの動画を作成し、ホームページやケーブルテレビで年間を通して放映した他、厚労省通いの場ご当地体操で公開した。	参加実人数1,998人、延人数22,440人 登録84団体
	2	はにとれサポーター養成講座	令和2年10月1日～11月19日 毎週木曜日	はにとれを行うサポーターを育成するため、埼玉県理学療法士会に講師を委託して実施した。併せてボランティア登録の説明を行った。	全8回 実人数14人、延106人 サポーター登録4人
	3	はにとれ教室リーダーフォローアップ研修	令和3年3月3日、10日 3月15日、22日 3月18日、25日	はにとれを行う団体の代表者やリーダーを対象に、埼玉県理学療法士会の講師と共に、新型コロナウイルス感染症予防対策や健康二次被害対策などの通いの場で活用できる知識や情報の提供の他、リーダー同士の情報交換を行い、活動再開に向けた支援を行った。	1コース2日間×3会場 実人数72人、延134人
	4	あたまからだの健康教室	令和2年10月14日～12月2日 毎週水曜日 令和2年10月15日～12月3日 毎週木曜日 令和3年1月22日～3月12日 毎週金曜日 令和3年1月21日～3月18日 毎週木曜日	あたまからだの健康教室サポーターと共に、認知症予防に有効とされる運動や頭を使ったゲーム等を行う教室を開催した。	1コース8回×4会場 実人数37人、延人数239人
	5	フレイル予防教室	令和3年3月2日～16日 毎週火曜日 令和3年3月9日～26日 毎週金曜日	フレイル予防の研修を受けたシルバー人材センターの会員による教室を実施した。	1コース3日間×2会場 実人数29人、延人数79人
地域リハビリテーション活動支援事業	1	いきいき教室	市内4会場 概ね毎月1回	介護予防のための運動、口腔機能向上のための講話や実技をリハ職が講師となり実施した。感染対策のため、教室を2班に分けて行った。参加申込書を見直し、参加者の健康状態や既往歴等を確認するとともに、アンケートを実施した。	月1回程度×4会場 実施回数29回、参加実人数137人、延人数612人
	2	はにぼんお口の健康体操	随時	はにぼんお口の健康体操については、感染予防対策のため、教室内で集団で実施する場合はマスクをしたままできる体操のみ実施するよう周知した。	実施団体27団体 回数438回、実人数930人、延人数8,862人
<p>取り組みの結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はにとれ教室の体力測定・アンケートの結果から、教室参加者の体力及び主観的健康観の向上がみられた。また、体調が良くなった、気持ちが明るくなった、人との交流が大事だと再認識したので教室を中止してほしくないなどの意見が聞かれた。また、この結果についてははにとれを行う団体の代表者に報告した。 ・いきいき教室については、参加者の状態把握のため、既往歴等の項目を専門職に助言いただきながら見直しを行った。得られた参加者の状況を、運動、栄養、口腔、認知、生活機能のリスクと主観的健康観について分析したところ、口腔機能に関する意識の低さがみられ、理解啓発を進める必要があることが認識できた。今後も体力測定や調査等を実施し、医療・介護等のデータや専門職等の助言も併せて評価・分析し運営に活かしていく。 ・教室の参加者には感染予防に関する教育を繰り返し行い、各自が対策をとって参加している。 ・フレイル予防教室については、健康寿命の延伸と高齢者の生きがいづくりの両面から進めることが可能と考えられるが、来年度介護予防事業の取り組みとして実施しながら検証を続ける。 ・サポーターの育成については、高齢者の生きがいづくり等を含め、他事業や関係機関と連携した取り組みが必要である。 ・認知症簡易チェックシステムについては、利用件数と相談件数との相関が見られなかったため、セルフチェックとともに相談機関について併せて周知していく必要がある。 					